

Title	秦公簋銘のデザイン性に関する研究
Author(s)	Wu, Yunfeng
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89279
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

秦公簋銘のデザイン性に関する研究

WU YUNFENG 京都工芸繊維大学大学院在学

秦公簋は、現在、中国国家博物館に所蔵されている春秋時代の秦国の青銅製食器で、1919年に甘肅省天水市で発掘されたものである。高さ19.8cm、口径18cm、直径23cm、脚部直径19.5cm、器と蓋が各一点ずつあり、器には10行54文字、蓋には5行51文字、合計105文字が鑄造されている。

秦公簋銘は、秦帝国統一後の小篆の作成の基礎となった大篆の様式を受け継いでいる。その筆法は、一様に見えるが、実際には微妙な変化に富んでいる。結体は、実用性を重視し、過剰な装飾を排し、規則正しい。章法は、活字印刷術の先駆けと見なされる可動式活字鑄型によって鑄造している。この技法により、今までにない章法で文字を配置することが可能になった。

春秋時代における秦系金文の発展過程

紀元前770年、西周が滅び、周の平王は、都を洛邑に移し、東周を建国した。これが春秋時代の始まりとなった。激動と分裂の政治情勢は、強い観念の変化と思想の解放をもたらした。春秋時代の中頃から各諸侯の書も次第に大篆の枠から解放され、書体の革新が始まった。春秋時代中期以降、書体革新は楚国に代表される装飾文字と秦国に代表される実用文字という二つの方向に分かれることになった。秦系金文が楚系金文と大きく異なるのは、常に『史籀篇』をベースにしていたことである。

これまで発掘された春秋時代秦国の銘文入り青銅器はあまり多くはない。代表的なものは、秦公鐘、秦公罍、そして秦公簋である。秦公鐘と秦公

罍（以下、「鐘」、「罍」と略す）は、秦の武公、春秋時代の初期に製作されたものである。その書風は西周の宣王時代に『史籀篇』に従う虢季子白盤銘（以下、「盤銘」と略す）と似ている。盤銘と鐘・罍銘を基に、秦公簋銘はさらに単純化、標準化された例である。盤が製作された時代は鐘・罍と100年余り離れている。この流れに従うと、秦公簋が製作されたのは、100年余り後の春秋時代の中末期である可能性が高いと推測される。

秦公簋銘筆法のデザイン性について

筆法とは、重さ、速さ、直角度、曲率、直進性などを決める筆の運び方のことである。秦公簋銘の筆法は全体的に統一しているように見えるが、実は筆画の形は様々で、起筆、送筆、収筆から見ても微妙な変化がある。筆画の太さは常に一定で、正鋒つまり筆先が筆画の中心となるように送筆することを多く使用している。

デザイン美学の観点から見ると、秦公簋銘の筆法は、まさに対立と統一の法則を表している。また、秦公簋銘の筆法は、隸書体や楷書体の筆法と似る部分がある。そこから、王侯貴族が神鬼に対する祭祀を行うための金文は、庶民が日常で使う書体の隸書、楷書に発展し始めた。このような実用性を重視し、「人間本位（人間を中心とした）」というコンセプトが生まれるのは、「人の役に立つために器物を作る」という古代中国の設計思想が反映されているからである。この観念は、数千年にわたる封建社会の中で、中国古来のデザインの主流で、人間性、機能性、人道的観念を維持する

ことを可能にしているのである。

秦公簋銘結体のデザイン性について

結体とは、間架結構によって出来上がった文字の形をさす。秦公簋銘の結体の最も明らかな特徴は盤銘と鐘・罍銘を基に、書体革新の法則をさらに追及している点にある。盤銘や鐘・罍銘と比較すると、その結体は四角く規則正しく、同時代の楚系金文と比較すると、その結体は簡潔で文字の実用性を追求すると見られる。

当時、哲学界において、「文」と「質」をめぐる論争があった。「文」とは外面にあらわれた美しさを優先することである。「質」とは内面の実質で、内容や機能性を追求することである。要するに、デザイン美学における「装飾」と「機能」という関係に相当する。文質論争に関して当時の哲学思想傾向は大きく分けて二つあり、一つは儒家に代表される「文と質の統一」である。儒家は文と質を両方重視し、「文質彬彬（外見の美と実質とがよく調和していること）」が理想だと主張する。もう一つは、墨家と道家に代表される「文より質」である。墨家が主張する「文より質」は美を否定するものではなく、常に「質」を第一に考えるものである。道家が主張する「文より質」は物質の自然な美しさを追求する。よって、王子午鼎銘に代表される楚系金文は、儒家の「文と質の統一」という思想に影響を受けていることは明らかである。楚系金文は文字の装飾を重視するだけでなく、宗教祭祀の機能も与えられた。しかし、最後に王侯貴族に独占される現状からも抜け出せておらず、文字が本来果たすべき機能を果たさなかった。一方、秦公簋銘に代表される秦系金文は、「文より質」という思想に影響を受け、文字の機能性を重視する。文字を整理統一することも、人間本位という観念が芽生えることも、墨家の「非楽（礼楽制度に反対）」という主張に賛同すると考えられる。それは、文字の使用を貴族から一般大衆へと押し進める傾向であり、秦の建国後の文字の統一と小篆の作成

の基礎を築いたのである。同時に、認識と標準化を重視した秦系金文は、本来の字形に装飾的要素を加えず、簡素さを重視し、自然の美を追求する道家の傾向を反映している。

秦公簋銘章法のデザイン性について

章法とは文字の効果的な配置法で、字配りのことである。書体デザインにおけるレイアウトに似ている。金文の章法は、「行列なし（行列不揃い）」、「行あり列なし（行揃え列不揃い）」、「行列あり（行列揃え）」の三種類に分けられる。殷商時代の金文の多くは款識で、行や列がなく、文字数が少ない。章法は可読性に欠ける。その後、殷商時代末期の金文の行間が強調されることにより、可読性を高める「行あり列なし」という章法様式を形成した。そして西周中期では、字間や行間をバランスよく取れる「行列あり」という章法様式が現れた。さらに、西周中末期罍線の出現によって金文の章法がより謹厳で整然としている。次に、春秋時代の秦系金文は、西周中期以降の金文と章法がほとんど変わらず、「行列あり」に属する。しかし、繰り返し文字の出現頻度が増えるにつれ、全文の字型を鑄造するには膨大な時間と手間がかかり、再利用することも難しい。そのため、春秋時代中末期に、活字印刷術の先駆けと見なされる可動式活字鑄型が現れた。この技法により、今までにない章法で文字を配置することが可能になった。

秦公簋銘の章法は、デザインにおける技術的要素と芸術的要素の相互作用を反映している。技術と芸術は、二つの異なる人工的な創造物のように見えるが、実は同じ精神活動の表裏一体であり、最高の技術的成果は最高の芸術の状態をも表しているのである。青銅鑄造業において、技術の試行や改良の多くは器形、文様及び銘文のデザインや配置に反映される。逆に、多くの器形、文様及び銘文は、新しい技法に触発されて形作られたり、古い技法に制限されたりしている。